

溺れかけた兄妹

有島武郎

青空文庫

土用波どようなみという高い波が風もないのに海岸に打寄うちよせる頃ころになると、海水浴みよこに来ている都

の人たちも段々別荘をしめて帰ってゆくようになります。今までは海岸の砂の上にも水の中にも、朝から晩まで、沢山の人が集って来て、砂山からでも見ていると、あんなに大勢な人間がいたい何所どこから出て来たのだろうと不思議に思えるのですが、九月にはいつてから三日目になるその日には、見たすかぎり砂浜の何所にも人つ子一人いませんでした。
私わたしの友達のMと私と妹とはお名残だといって海水浴にゆくことにしました。お婆ばあさま様が波が荒くなつて来るから行ゆかない方がよくはないかと仰おつしや有ったのですけれども、こんなにお天気はいいし、風はなしするから大丈夫だといって仰有おつしやることを聞かずに出かけました。

丁度昼少し過ぎで、上天気で、空には雲一つありませんでした。昼間でも草の中にはもう虫の音ねがしていましたが、それでも砂は熱くつて、裸足はだしだと時々草の上に駈かけ上あがらなければいられないほどでした。Mはタオルを頭からかぶってどんどん飛んで行きました。私は麦稈むぎわら帽子ぼうしを被かぶった妹の手を引いてあとから駈かけました。少しでも早く海の中につかりたいので三人は氣息いきを切つて急いなのです。

紆波うねりといえますね、その波がうつっていました。ちやぷりちやぷりと小さな波が波打際なみうちぎわでくだけるのではなく、少し沖の方に細長い小山のような波が出来て、それが陸の方を向いて段々押寄せおしよて来ると、やがてその小山のてつぺんが尖とがつて来て、ざぶりと大きな音をたてて一度に崩れかかるのです。そうすると暫しばらく間まをおいてまたあとの波が小山のように打寄せうちよて来ます。そして崩れた波はひどい勢いで砂の上に這はい上あつて、そこら中じゅうを白い泡で敷きつめたようにしてしまふのです。三人はそうした波の様子を見ると少し気味悪くも思いました。けれども折角せつかくそこまで来ていながら、そのまま引返ひきかえすのはどうしてもいやでした。で、妹に帽子を脱ぬがせて、それを砂の上に仰向あおもむけにおいて、衣物きものやタオルをその中に丸めこむと私たち三人は手をつなぎ合せて水の中にはいつてゆきました。

「ひきがしどいね」

とMがいました。本当にその通りでした。ひきとは水が沖の方に退ひいて行く時の力のことです。それがその日は大変強いように私たちは思つたのです。踝くるぶしくらいまでより水の来ない所に立っていても、その水が退いてゆく時にはまるで急な河の流れのようで、足の下がどんどん掘れるものですから、うっかりしていると倒れそうになる位でした。その水の沖の方に動くのを見ていると眼めがふらふらしました。けれどもそれが私たちには面

白くつてならなかったのです。足の裏をくすむるように砂が掘れて足がどんどん深く埋ま
 ってゆくのがこの上なく面白かったのです。三人は手をつないだまま少しづつ深い方には
 いってゆきました。沖の方を向いて立っていると、膝ひざの所で足がくの字に曲りそうになり
 ます。陸の方を向いていると向むこう脛すねにあたる水が痛い位でした。両足そくを揃そろえて真直まっすぐに
 立ったままどっちにも倒れないのを勝かちにして見たり、片足で立ちっこをして見たりして、
 三人は面白がつて人魚のように跳ね廻まわりました。

その中うちにMが膝ひざぐらゐ位の深さの所まで行つて見ました。そうすると紆波うねりが来る度たびごとに
 Mは脊延せのびをしなければならぬほどでした。それがまた面白そうなので私たちも段々深ふ
 味かみに進んでゆきました。そして私たちはとうとう波のない時には腰位まで水につかるほど
 の深味に出してしまいました。そこまで行くと波が来たらただ立っていたままでは追付おつきま
 せん。どうしてもふわりと浮あがき上らなければ水を吞のませられてしまうのです。

ふわりと浮うきあが上ると私たちは大変高い所に来たように思いました。波が行つてしまうの
 で地面に足をつけると海岸の方を見ても海岸は見えずに波の脊中せちゅうだけが見えるのでした。
 その中にその波がざぶんとくだけます。波打際なみうちぎわが一面めんに白くなって、いきなり砂山や妹
 の帽子などが手に取るように見えます。それがまたこの上なく面白かったのです。私たち

三人は土用波^{どようなみ}があぶないということも何も忘れてしまつて波越^{なみこ}しの遊びを続けさまにやつていました。

「あら大きな波が来てよ」

と沖の方を見ていた妹が少し怖^{こわ}そうな声でこういきなりいきましたので、私たちも思わずその方を見ると、妹の言葉通りに、これまでのとはかけはなれて大きな波が、両手をひろげるような恰好^{かつこう}で押寄せて来るのでした。泳ぎの上手なMも少し気味悪そうに陸の方を向いていくらかでも浅い所まで遁^にげようとした位でした。私たちはいうまでもありません。腰から上をのめるように前に出して、両手をまたその前に突出^{つきだ}して泳ぐような恰好をしながら歩こうとしたのですが、何しろひきがひどいので、足を上げることも前にやることも思うようには出来ません。私たちはまるで夢の中で怖い奴^{やつ}に追いかけてられている時のような気がしました。

後^{うしろ}から押寄せて来る波は私たちが浅い所まで行く^{ゆく}のを待つていてはくれません。見る見る大きく近くなつて来て、そのてっぺんにはちりちりと白い泡がくだけ始めました。Mは後^{うしろ}から大声をあげて、

「そんなにそつちへ行くと駄目だよ、波がくだけると捲^まきこまれるよ。今^{うち}の中に波を越す

方がいいよ」

といいました。そういわれればそうです。私と妹とは立たちどま止とめて仕方なく波の来るのを待っていました。高い波が屏びようぶ風ふうを立てつらねたように押寄せて来ました。私たち三人は丁度具合よくくだけない中に波の脊を越すことが出来ました。私たちは体をもまれるように感じながらもうまくその大波をやりすごすことだけは出来たのでした。三人はようやく安心して泳ぎながら顔を見合せてにこにこしました。そして波が行ってしまうと三人ながら泳ぎをやめてもどのように底の砂の上に立とうとしました。

ところがどうでしょう、私たちは泳ぎをやめると一しよに、三人ながらずぼりと水の中に潜くぐってしまいました。水の中に潜つても足は砂にはつかないのです。私たちは驚きしました。慌あわてました。そして一生懸命にめんかきをして、ようやく水の上に顔だけ出すことが出来ました。その時私たち三人が互たがに見合せた眼といったら、顔といったらありません。顔は真青まっさおでした。眼は飛び出しそうに見開いていました。今の波一つでどこか深い所に流されたのだということを私たちはいい合わさなくても知ることが出来たのです。いい合わさなくても私たちは陸の方を眼がけて泳げるだけ泳がなければならないということがわかったのです。

三人は黙ったままで体を横にして泳ぎはじめました。けれども私たちにどれほどの力があつたかを考えて見て下さい。Mは十四でした。私は十三でした。妹は十一でした。Mは毎年まいねん学校の水泳部に行っていたので、とにかくあたり前に泳ぐことを知っていました。私は横のし泳ぎを少しと、水の上に仰向けあおむに浮くことを覚えただけです。妹はようやく板を離れて二、三間泳ぐことが出来るだけなのです。

御覧ごらんなさい私たちは見る見る沖の方へ沖の方へと流されているのです。私は頭を半分水の中につけて横のしでおよぎながら時々頭を上げて見ると、その度ごとに妹は沖の方へと私から離れてゆき、友達のMはまた岸の方へと私から離れて行って、暫らくしばの後は三人はようやく声がとどく位ぐらいたがいお互に離ればなれになってしまいました。そして波が来るたびに私は妹を見失ったりMを見失ったりしました。私の顔が見えると妹は後うしろの方からあらん限りの声をしばって

「兄さん来てよ……もう沈む……苦しい」

と呼びかけるのです。実際妹は鼻の所ところぐらい位まで水に沈みながら声を出そうとするのですから、その度ごとに水を呑むのと見えて真蒼まつさおな苦しさうな顔をして私を睨にらみつけるように見えます。私も前に泳ぎながら心は後うしろにばかり引かれました。幾度いくども妹のいる方へ泳い

で行こうかと思いました。けれども私は悪い人間だったと見えて、こうなると自分の命が助かりたかったのです。妹の所へ行けば、二人とも一緒に沖に流されて命がないのは知れ切っていました。私はそれが恐ろしかったのです。何しろ早く岸について漁夫にでも助けに行ってもらう外はないと思いました。今から思うとそれはずるい考えだったようです。でもとにかくそう思うと私はもう後も向かずに無我夢中で岸の方を向いて泳ぎ出しました。力が無くなりそうになると仰向に水の上に臥て暫らく氣息をつきました。それでも岸は少しずつ近づいて来るようでした。一生懸命に……一生懸命に……、そして立泳ぎのようになって足を砂につけて見ようとしたら、またずぶりと頭まで潜ってしまいました。私は慌てました。そしてまた一生懸命で泳ぎ出しました。

立つて見たら水が膝の所位しかない所まで泳いで来ていたのはそれからよほどたつてのことでした。ほっと安心したと思うと、もう夢中で私は泣声を立てながら、

「助けてくれえ」

といって砂浜を氣狂いのように駆けずり廻りました。見るとMは遙かむこうの方で私と同じようなことをしています。私は駆けずりまわりながらも妹の方を見ることを忘れはしませんでした。波打際から随分遠い所に、波に隠れたり現われたりして、可哀そうな妹の

頭だけが見えていました。

浜には船もいません、漁夫りようしもいません。その時になって私はまた水の中に飛び込んで行きたいような心持ちになりました。大事な妹を置きっぱなしにして来たのがたまらなく悲しくなりました。

その時Mが遥かむこうから一人の若い男の袖そでを引ひつてこつちに走って来ました。私はそれを見ると何もかも忘れてそつちの方に駆け出しました。若い男というのは、土地の者ではありましようが、漁夫とも見えないような通りがかりの人で、肩に何か担になつていました。

「早く……早く行つて助けて下さい……あすこだ、あすこだ」

私は、涙を流し放題に流して、地じだんだをふまないばかりにせき立てて、震える手をのばして妹の頭がちよっぴり水の上に浮うかんでいる方を指しました。

若い男は私の指す方を見定めていましたが、やがて手早く担おつていたものを砂の上に卸おろし、帯をくるくると解いて、衣物きものを一緒にその上におくと、ざぶりと波を切つて海の中にはいつて行つてくれました。

私はぶるぶる震えて泣きながら、両手の指をそろえて口の中へ押おこんで、それをぎゅつ

と齒でかみしめながら、その男がどんどん沖の方に遠ざかって行くのを見送りました。私の足がどんな所に立っているのだから、寒いのだか、暑いのだか、すこしも私には分りません。手足があるのだからないのだからそれも分りませんでした。

抜手^{ぬきて}を切つて行く若者の頭も段々小さくなりまして、妹との距^{へだ}たりが見る見る近よつて行きました。若者の身のまわりには白い泡がきらきらと光つて、水を切った手が濡^ぬれたまま飛^{とびう}魚が飛ぶように海の上に現われたり隠れたりします。私はそんなことを一生懸命に見つめていました。

とうとう若者の頭と妹の頭とが一つになりました。私は思わず指を口の中から放して、声を立てながら水の中にはいつてゆきました。けれども二人がこつちに来るののおそいこととおそいこと。私はまた何^{なん}の訳もなく砂の方に飛び上りました。そしてまた海の中にはいつて行きました。如何^{どう}してもじつとして待つていることが出来ないのです。

妹の頭は幾度^{いくど}も水の中に沈みました。時には沈み切りに沈んだのかと思うほど長く現われて来ませんでした。若者も如何かすると水の上には見えなくなりました。そうかと思うと、ぽこんと跳ね^は上るように高く水の上に現われ出ました。何んだか曲^{きよく}泳^{およ}ぎでもしているのではないかと思われるほどでした。それでもそんなことをしている中に、二人は段

々岸近くなつて来て、とうとうその顔までがはつきり見える位になりました。が、そこいらは打寄せる波が崩れるところなので、二人はもろともに幾度も白い泡の渦巻うずまきの中に姿を隠しました。やがて若者は這はうようにして波打際にたどりつきました。妹はそんな浅みに来ても若者におぶさりかかっていました。私は有頂天うちようてんになつてそこまで飛んで行きました。

飛んで行つて見て驚いたのは若者の姿でした。せわしく深く氣息いきをついて、体はつかれ切つたようにゆるんでへたへたになつていました。妹は私が近づいたのを見ると夢中で飛んで来ましたがふつと思いかえたように私をよけて砂山の方を向いて駆け出しました。その時私は妹が私を恨うらんでいるのだなと気がついて、それは無理のないことだと思つと、この上なく淋さびしい気持ちになりました。

それにしても友達のMは何所どこに行つてしまつたのだらうと思つて、私は若者のそばに立ちながらあたりを見廻すと、遙かな砂山の所をお婆ばあさま様を助けながら駆け下りて来るのでした。妹は早くもそれを見付けてそちに行こうとしているのだとわかりました。

それで私は少し安心して、若者の肩に手をかけて何かいおうとすると、若者はうるさそうに私の手を払いのけて、水の寄せたり引いたりする所に坐すわりこんだまま、いやな顔をし

て胸のあたりを撫でまわしています。私は何んだか言葉をかけるのさえためらわれて黙ったまま突立っていました。

「まああなたがこの子を助けて下さいましたんですね。お礼の申しようも御座んせん」

すぐそばで氣息せき切ってしみじみといわれるお婆様の声を私は聞きました。妹は頭からずぶ濡れになったまままで泣きじやくりをしながらお婆様にぴったり抱かれていました。

私たち三人は濡れたまま、衣物やタオルを小脇に抱えてお婆様と一緒に家の方に帰りました。若者はようやく立上って体を拭いて行ってしまうとするのをお婆様がたって頼んだので、黙ったまま私たちのあとから跟いて来ました。

家に着くともう妹のために床がとってありました。妹は寢衣に着かえて臥かしつけられると、まるで夢中になってしまつて、熱を出して木の葉のようにふるえ始めました。お婆様は氣丈な方で甲斐々々しく世話をすますと、若者に向つて心の底からお礼をいわれました。若者は挨拶の言葉も得いわないような人で、唯黙つてうなずいてばかりいました。お婆様はようやくのこととでその人の住っている所だけを聞き出すことが出来ました。若者は麦湯を飲みながら、妹の方を心配そうに見てお辞儀を二、三度して帰って行つてしまいました。

「Mさんが駆けこんで来なすつて、お前たちのことをいいなすつた時には、私は眼がくらむようだったよ。おとうさんやお母さんから頼まれていて、お前たちが死にでもしたら、私は生きてはいられないから一緒に死ぬつもりであの砂山をお前、Mさんより早く駆け上りました。でもあの人が通り合せたお蔭かげで助かりはしたもののこわいことだったねえ、もうもう気をつけておくれでないとほんに困りますよ」

お婆様はやがてきつとなつて私を前にすえてこう仰おつしや有いました。日頃ひごろはやさしいお婆様でしたが、その時の言葉には私は身も心もすくんでしまいました。少しの間あいだでも自分一人が助かりたいと思つた私は、心の中をそこら中じゆうから針でつかれるようでした。私は泣くにも泣かれないでかたくなつたままこちんとお婆様の前に下を向いて坐りつづけていました。しんしんと暑い日が縁えんの向うの砂に照りつけていました。

若者の所へはお婆様が自分で御礼おれいに行ゆかれました。そして何か御礼の心でお婆様が持つて行いかれたものをその人は何んといつても受取らなかつたそうです。

それから五、六年の間はその若者のいる所は知しれていましたが、今は何処どこにどうしているのかわかりません。私たちのいいお婆様はもうこの世にはおいでになりません。私の友達のMは妙なことから人に殺されて死んでしまいました。妹と私ばかりが今でも生き残つ

ています。その時の話を妹にするたんびに、あの時ばかりは兄さんを心から恨めしく思
たと妹はいつでもいいいます。波が高まると妹の姿が見えなくなったその時の事を思うと、
今でも私の胸は動悸どつきがして、空恐ろしい気持ちになります。

青空文庫情報

底本：「一房の葡萄 他四篇」岩波文庫、岩波書店

1988（昭和63）年12月16日改版第1刷

親本：「一房の葡萄」叢文閣

1922（大正11）年6月

初出：「婦人公論」

1921（大正10）年7月

入力：鈴木厚司

校正：地田尚

1999年9月27日公開

2005年11月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

溺れかけた兄妹

有島武郎

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>